一夜春風頭欲白　一夜　春風　頭　白からんと欲す
樽中賴有酒如泉　樽中　さいわいに酒の泉のごときあり
醉倚寒窗破愁寂　醉って寒窗に倚って　愁寂を破る

これは明らかに李賀の詩にもとづく作だ。金・元の人たちには、李賀を好み、その詩風を学ぶ人が多い。それがなぜか、ということは一つの課題だが、ここではそこへは立ち入らない。

『元史』隱逸伝によれば、杜瑛は字文玉、霸州信安の人。金の亡びようとするとき、河南の緱氏山中に避難し、諸書を渉猟して尽く読み、忘れず、その旨趣を極め、のち汾晋の間で教授した。元の代に召されたが仕えず、門をとざして書を著した。文集十巻のほか著作豊富だといわれる。

かれが避難した緱氏山は李賀の家居の地昌谷に近い。金の元好問が女几山下に隱栖して賀の詩を読んだであろうように、杜瑛も緱氏山で賀の集を読んだのではないだろうか。

杜瑛の文集をわたしは知らない。『国朝文類』にはこのほか「留春曲」「秋思」「征南口号」がある。

〈雜記・69〉　彭　纘　9.二

一九七三年四月九日、立ち寄った書店で、埃をかぶった零本の堆積の中から『秋士先生遺集』を掘り出した。二冊六巻、目次にあわせると全い完本で、巻四に「読李賀集」一首がある。埋没していた本にしては高価だったが、購った。その作

李賀合造玉樓居　李賀はまさに玉楼にいたって居るべし
蒼蒼憐之召以書　蒼蒼これを憐れみて召すに書をもってす
紅顏黑頭魂別去　紅顏　黑頭　魂　別去し
天上有賀人間無　天上に賀ありて人間になし
我誦賀詩每歎息　われ賀の詩を誦してつねに歎息す
童時鈔錄今有須　童時に鈔録して今もちうるあり
奉常小官不可得　奉常は小官なれども得べからず
講授里中三兩徒　講授す　里中　三両徒
生逢堯舜窮亦樂　生きて堯舜に逢わば窮もまた楽し
食肉富貴何爲乎　肉を食らいて富貴なる　何かせんや

あまりいい詩とは思えないが、ひとつの李賀評ではあろう。

この集の著者は、彭績（一七四二―一七八五）。初めの字は其凝、あるいは其疑、秋士はあらためた字である。江蘇長洲の人。終身仕えなかった。古文家として知られる彭紹升（一七四〇―一七九六）は同族で「秋士先生墓誌銘」などを書いている。

徐世昌編『晚晴簃詩匯』巻六十三に〈秋士は耿介絶俗、その詩は情を孤冷に寄せ、徑を鑱刻に取る〉とし、汪縉（一七二五―一七九二）のことばを引いて〈東野・浪仙の流なり〉すなわち孟郊・賈島をおもわせる詩風だ、という。「雪夜」（巻四）

枇杷時華澤腹堅、刈溪之水誰刺船、開門大野雪十里、月光凍地不上天、獨飲濁酒倒半壺、一拊清琴鳴五絃、青鋏紅鑪臥白屋、夢遊姑射驚神仙

などは、その一例といえようか。「百華洲學館獨夜無眠有懷一二知己」（巻四）

大木蒙蔽小徑、空齋欣接高城、沈沈清夜將半、悲感涼風自生、鎖晴人愁一個、月明鬼嘯三聲、新知舊識無因敘情、

は六言だが、ややかに李賀の風がただよう。「陸先生詩集敘」（巻五）は、亡師陸圭仕のために書いた。〈先生の詩は、神遊思鎔、骨聲清勁、古の孟郊・韓愈、李賀はその亜か〉という。ここにも李賀を学ぶ人がいる、というよりは江蘇には李賀を愛読する人が多かったのであろう。

李賀とのかかわりを因みに言ったのだが、それをはなしても読んでたのしめそうな詩文である。

（『雅記』70）　黄光　続　5.12

本誌第四号の『雅記』26に、李賀集の明版のひとつに黄光なる人の校本があることを書いた。「しの五月四日『明詩紀事』を読んでいて辛籤巻十八に次の記事を見出した。

黄光一首　光、字は若木。莆田の人。天啓丁卯の挙人。官は来安知県。十一洲詩草あり。蘭陔詩話。若木は駢体文に工にして、奇篇麗句、斉梁に枕藉す。　溫陵旅宿　寒夜一何長、鳴雞信不曙、秣馬促晨炊、暗逐雨光去、

莆田は福建省の県名。天啓丁卯は一六二七年。来安県は安徽省にある。さきの校本は〈天啓元版〉だから時代は合う。わたしの架蔵の写本『李長吉詩集』の校者は〈莆中若木黄光〉で、莆中を「備中」だ

ろうと書いたが、「莆田」の誤記かもしれぬ。そうして若木は「わかぎ」ではなく黄光の字かもしれぬ。ただ、そのばあい、〈江夏黄光〉と序文の末に署名しているのが、いまのわたしにはよくわからない。あるいは明代の成化・弘治のころ呉僧にはじまる江夏学派の人だったのだろうか。

〈雑記・71〉　楚辞与楞伽　9.二

『博士課程研究論文要旨―昭和47年度』（京都大学大学院文学研究科）を高橋達明氏から借覧し、楊鐘基「楚辞與楞伽―李賀論」を読んだ。

楚辞に関する記述のなかに〈小林太市郎蔵「楚辞集註」〉に引く〈李賀評離騒語〉と〈天問下引李賀評〉が引いてある。この二つは楊氏の注によれば〈「李賀研究」第二号（一九七一年三月、方向社刊）殷田憲雄「李賀評楚辞」〉による。わたしのその文章では「李賀の評語」が、はたして賀のものかどうかについては、疑問を出しておいた。氏は疑うことなく扱っているようにみえる。あの評語を賀のものでないと断定する資料をもため。しかし、それを収める『楚辞集註』は明人の編集で、出所も明記してなかったように記憶する。またその本以前に賀の評語について語ったものを、管見ながら知らない。わたしとしては、あの評語を賀のものとして扱うことはよほど慎重でなければならないだろう、と考える。楊氏がわたしの知らぬ根拠を持たれるなら、ぜひ教えてほしい。

楞伽に関する部分でも拙論を紹介され槐報にたえない。氏は「大乗入楞伽経」巻二の〈無知愛業之所生起眼等識生、取於識等而生計著……〉巻一の百八問中の〈……云何起計度……〉各数行をひき、賀の詩の若干をこれに対応させて

案前之楞伽、勢必至於無所可用、肘後之楚辞、遂成離憂之侶。捨彼就此、而「我有迷魂招不得、雄雞一声天下白」（「致酒行」）遂為此矛盾之写照。

と結論する。要領のいい論文で感心したが、頑愚のわたしには、李賀が〈捨彼就此〉であったかどうかが、よくわからないのである。

楞伽三訳のうち唐訳を送んで引く理由もわからない。

「要旨」には見えぬこれらのことも、本論では委細に説かれてあるのかもしれぬ。それを読む日を楽しんで待ちたい。

9.17

《雑記・72》　朱彝尊

一九七三年五月一日のメモに、朱彝尊の「一葉落」詞を書きとめている。

淚眼注、臨当去、此時欲住已難住、下楼復上楼、楼頭風吹雨　風吹雨、草草離人語、

風吹雨は「蘇小小墓」の語。どこから書きぬいたのか記してないが『曝書亭集』をみたら、巻二十七にあった。巻二十五から巻三十までの五巻が詞で、すべてのスタイルを試みようとしたのかと思われるほど意欲的である。巻三十は「蕃錦集」と名づけ、唐人の詩句の断片ばかり集めて作った詞百九首をおさめる。

十六字令　春暮

愁別後花時独上楼　風吹雨　春肯為人留

よほど風吹雨が気にいっていたとみえる。

桂殿秋　別城客夜

月淚流雨微微　故郷山水路依稀　近来欲睡兼難睡　正是帰時宜下帰

といった調子で、このほか、董風起、草如茵、万条寒玉一溪煙、歌淫淫、管悁悁、荷塘尚扇、得明珠十斛、平陽花塢、幽蘭露、染羅衣、絲帯平鋪吹不起、相勸酒、草細堪梳、日將暮、今朝誰是拗花人、西陵下、舞蛟龍、田風拂拂、の語や句が採摭されている。見落しがあるかもしれぬ。詞に使いやすい句が取る基準になっていようが、朱氏の好尚もうかがわれる。

朱氏の才学の宏博はかねて聞くところだが、彼の集に接するたびに、それを実感する。「学者」というのはこれくらいの蓄積をもってはじめてよぶにふさわしくなるのであろうか。

9.17

《雑記・73》　刊落凡庸

古いメモの陳列で恐縮だが、これも一九七三年九月十四日。周亨俠の「詩学枝譚続」（『庫言』第一巻六号・民国二年二月十六日）

学詩当揣其性之所近。不可勉強從事。然其中亦有運会焉。長吉義山之流派大盛於元、少陵則盛於明。昌黎東坡則盛於前清。

唐人七古有八体。鋪敘有倫。言節婉転。王楊盧駱体也。散中帯整。風格遒上。高岑王李体也。縱逸

変化。奇趣橫生。太白体也。雄渾悲壯。罕襲万有。少陵体也。軒豁条暢、突兀華理。元白体也。淺語盤空。蜿蜒突兀。昌黎体也。刊落凡庸。独標幽興。長吉体也。色奇興佳。力求言外。温李体也。其中以李杜為称大宗。余皆各樹一幟。不相沿襲。終唐之世。無出此八体外者。後人学之。亦未有出此八体外者。

とりたてて珍しい説でもない。まずはそつなく概括したというところであろう。李賀の体を刊落凡庸とけずりおとした、というのがちょっとおもしろく感ぜられたのだろう。などといいながら、おたしの雑記の凡庸陳列、おはずかしいかぎりである。陳列のしかたの凡庸が。

〈雑記・74〉　長吉七古五古　（一二）

前条といくらかかわるので日付のないメモから一条。楊鍾羲『雪橋詩話』（詩史長編本一二八頁）

長吉飛卿七言古詩、音節格調、於同時韓白諸公之外、自樹旗幟、其濃麗処、亦非不学人所能。

これもおたりまえで、とりたてた意見でもないとおもうが、そのあたりまえのことも、この詩話が書かれた時代としては人のいわないことだったのだろうか。

楊氏の批評家としての見識は、その詩話を熟読して知ることができるが、『歴代五言詩評選』の編集からもうかがうことができる。巻十一に賀の作から『還自会稽歌』『感遇五首』の一と二を採録し、次のようにいう。

伝言賀詞尚奇詭、為詩未娟先立題、所得皆鬱遇、遠去筆墨晦迹、宋景文諸公在館、嘗評唐人詩云、太白仙才、長吉鬼才、朱子曰、李賀詩巧、然較怪、不如太白自在、

陸祁孫曰、唐人五言、蘇州昌谷俱深入建安、而知昌谷者絶少、

その集『昌黎遺先生詩』もときどきとり出して読む。老儒の詩で、李賀の詩とはまた「たく風を異にするが、「題荒南台寄李杳君小景」の

南雲娟娟筆、春風写鬢絲、晴窗閒撿點、羨爾太平時、

の第二句や、「和庸蕃」の

清淺如鉛共酒傾　諧達北客意難平、求金霊紀天王使、迴轍誰蘇子弟兵、奴僕莊施宣躍路、相公裴閣用咸英、随風柳絮飛揚甚、悽絶枯葵泫露情、

の初句などは、おきうかに翼の影響を帯びる。

《雑記・75》　宣　城　本

一九七三年九月十一日、『李賀歌詩編』二冊を購った。台北市・国立中央図書館が中華民国六十年十二月に印行した、いわゆる宣城本の影印である。巻頭に付した斎衍琯「李録」の書誌に関する部分を左に書きうつす。

本館所蔵宋刊本二冊，首列目録，次杜牧序。每半葉九行，行十八字。白口，前四巻版心下記刻工：金宣、唐時、唐用、王景。宋諱玄、絃、眩、敬、驚、擎、弘、泓、殷、恒、桓等字缺筆。以乾道元年至九年公使軍田賦錢糧公牘紙印。按此刻南宋諸帝廟諱不避。集外詩一巻字体与原刊微異，版心下刻工為仝介、劉恭、金仲等，亦与原刊不同。殆北宋末年原刻，南宋初年增刊集外詩也。

書中有明文楠、清山陰司馬氏、近人袁克文及梅真手書題記或詩。就書中所鈐蔵印及題記，知経明王蒙、青浦氏、清山陰司馬氏、李振宜、徐乾学、近人袁克文、張近圃等遞蔵。

袁克文寒雲手写所蔵宋本提要廿九種云：「李長吉歌詩，蕘翁有金刊巾箱本，無集外詩，有注，今不知所歸，蓋入翼氏後又散去矣。他惟影写宋書棚本，椽燭氏記与金刊異。又有元刊所引之宣城本，自李氏後諸蔵家從無見之者。丁巳夏見於滬市，亟以重値易之，字体若唐人写経，刻工尤拙健。所見宋刊、無此之古雅者。詩中若高軒過一首東京才子文章公。又九精照耀貫当中。他本俱作云是東京才子，文章巨公，元稹耿耿貫当中，遂此本遠矣。金刊棚本，皆与此合，惟金刊視棚本尚多異同，不若棚本之善。棚本則多与此本合，而猶有不逮此本者。此本兼金刊、棚本之善而過之。若巻一蘇小小歌風雨吹，金刊吹作晦，棚本作風吹雨。巻四艾如張張在，野睿千書中。金刊春作田，棚本作山，皆以北宋本勝。」定徴此本之精善所在，固不僅以刊印之古，伝本之希而已。

この本は、わたしが「北宋本」と称し、李賀詩について語るときの底本としているものだ。かれの集の諸本中、最も精善なるものと考える点では斎氏と同じだ。その理由はすでにわたしの論文等に散説しているので繰返さない。ただ、袁氏のあげている文字が、それぞれの作品の文脈の中で最も精善といえるか、というと、疑問だろう。わたしは、もういちど先入主をすてて、この本の文字について考えてみたい、とは思っているが、他の本にとるべきところも少くはない。結論を急ぐことはない。この本を底

本として、そこへ、あらゆるヴァリアントを記入した、対校本をつくることが必要だ。その対校本をもとにして内的保証をすすめれば、その研究者にとっての決定的なテキストが生まれるだろう。ついでながら、李賀詩の索引には、対校本のすべての文字が包含される必要がある。

対校本の作製、索引の作製は、気になって、なんどもやりはじめながら出来ないでいる。いつだったか、そのことを荒井健氏にいったら、対校本は自分がしてもよい、と答えられた。以来その完成を、一日千秋の思いで待ちくらしている。だが考えれば、わたしは怠惰にすぎるかもしれぬ。

この本の本集四巻は『密韻楼景宋本七種』にはいっており、外集一巻は『四部叢刊』初集にはいっている。わたしは最初に未冒本をノートにうつし、次いでこの本との異同を記し、他本にも及んだが、この本がもっともよいことに気づき、あらためてこの本を写した。なんども校正したつもりだが、疑問が出て、確かめにゆくたびに校正洩れを見出した。昭和二十年代にそのことをはじめ、数年前、思いきって本集四巻を復写してもらった。それからまもなく台北本が出た。もういらないような気もしたが、手にいれてみると、この序録があり、また、密韻楼の景本より「刻工尤拙健」なところが出ているので、甲斐があった。

李賀の集をいま読む人の幸福は、羨ましいかぎりだが、手で書き写す以外にその本をわがものとしえなかったかつてのわたしのほうが幸福だったのかもしれぬような感じもせぬではない。

李長吉覚書抄

9.23

〈卒業論文『李長吉』を書く前後に李賀に関するノートを幾冊か書き、……ノートはどこかに紛れこんだままだが〉と、「『李長吉』周辺」（本誌第一号）のはしがきに書いた。その一冊が出てきた、というより、その一冊から書きぬいた日付のないメモ集につづけて、一九五一年十二月十九日から一九五三年六月二十六日までの日付のあるメモを含む一冊の手帖が出てきた。日付のあるものの後半はおおむね読んだ本の書きぬきである。日付のないものは、昭和十五年（一九四〇）十六年（一九四一）に書いたものであろう。いずれも、とるにたりないものだが、そのうちまだ発表したことのないとおもわれるものを抄出する。

＊人間への信頼＊

言葉の奥に篤く埋めた〈たましい〉に鶴嘴をあてて、鏗錚の響きを掘りおこす者の出現を百年の後にも信ぜずして、なお当世に容れられぬ詩を書き続ける者がいるだろうか。詩は人間への信頼である。この信頼が、窮乏の底に屢々生を咀うた詩人をも生きしめたのであった。

＊感受性＊

La raison elle-même ... n'est que de la sensibilité cristalisée. Remy de Gourmont

Criticism is a development of sensibility. T.S.Eliot

＊概念の縮小＊

詩は、その本性に従ってふかく進めば進むほど、そこから概念は縮小消滅してゆく。つまり意味が消えてゆく。

霏株防膺怯　悩公

の句についていうと、霏ないし怯のいちいちの文字は、それぞれ、一個あるいは数個の概念を、もっている。長吉によって獲得されたこの組合せの中での霏ないし怯のいちいちのもつ意味は、もはや組合せる以前のいちいちの文字のもつ概念とは別個のものである。このことを記号化すると次のようになる。

霏＝A　株＝B　防＝C　膺＝D　怯＝E

霏の蔑沙＝a　株の蔑沙＝b　防の蔑沙＝c　膺の蔑沙＝d　怯の蔑沙＝e

A＝a　B＝b　C＝c　D＝d　E＝e

A×B×C×D×E＝ABCDE

$$A' = \frac{A}{ABCDE} = a', \quad B' = \frac{B}{ABCDE} = b', \quad \cdots\cdots$$

$a' \neq a$　$b' \neq b$　$c' \neq c$　$d' \neq d$　$e' \neq e$　これがすなわち概念の消滅

$$\frac{A}{ABCDE} \neq \frac{A}{ACBDE} \neq \frac{A}{BCDEA} \neq \cdots$$

$a'b'c'd'e'$は古い意味$abcde$の消滅によって生じた新しい意味、すなわちポエジーである。

長吉の詩にあっては意味の消滅が意識的に方法として用いられているようである。音楽にはほとんど概念性がない。ショペンハウエルは、音楽は意志そのものの写しであり他の諸芸術よりも深く強く世界の実相をうつす、という。長吉の詩のあるものは、音楽に近い。

長吉の詩は、理において欠けるところがある、といわれる。いう批評家によって、理の内容が異るようだが、いま仮にそれをある種の概念性だとすると、かれの詩はもともと理を超えている、といいうる。問題は、かれの詩は音楽に近いが、音楽そのものではない、その違い目に何があるか、ということ、またよくわからないが、そこに、価値観やモラルといったものがかれの詩の側に（あろうと感ぜられる。

＊長歌続短歌＊

この詩の美しさは、無類だ。長吉の詩の中でも、これに匹敵するのは「感諷五首」の三や「蘇小小墓」などの数首にすぎない。文字実に、この詩に触れるものがなく、詞華集に、この詩を選ぶものを見ないのは、どうしたことであろう。唐の詩を論じてこの詩に触れない批評家は、詩がわからぬか、見ぬ者かの、どちらかだ。黄陶庵は「率」と評するのみ、黎二樵は一言半句も触れない。そうして、その前の「武酒行」には「絶無雕刻、奠率之至者也、奠之不可及、乃在此等」（黄）「長吉少有此沈頓之作」（黎）などといっている。「こういうところはぼくにはわからない。王琦が「引喩微婉、深得楚騒遺意」といっているのはさすがだが、まだ言い足りない、という気がする。唐闇風は「長吉の月をうたった作品」の項で、「侯寂寞的情景中写月如「夜峰何離離、明月落石底」、徘徊沿石尋、照出高峰外」、不得与之逆、歌成翻先改」（長歌続短歌）……這些都是從静寂的境地中来、対月抒写的所謂由月写情、由情写月、這種詩句、就是有此情致的。」というが、特にこの詩の美しさを取り出していっているわけではなく、「寂寞」はいいが「静寂」となれば、この詩のパトスとは合わぬだろう。

名高い詩とすぐれた詩とは同じくない。この詩は名を得なかったすぐれた詩だ。

ひとは辭を特徴と思いがちである。「あの詩人の特徴は」ということばが出たら、それはその詩人の辭についての談義だと考えて、ほぼまちがいない。立派な詩は、辭から抜け出しているものなのだ。

長吉の詩について語られるとき、「感諷」「長歌続短歌」「秋涼詩」には触れられず、「李憑箜篌引」

「雁門太守行」「高軒過」が挙げられる。後者は前者よりすぐれているのではなく、長吉の癖が多く出ているからにすぎない。癖は往々にして欠点である。「高軒過」の有名は、詩としての結晶度によってではなく、まつわるエピソードによるものである。

＊長吉詩の一特徴＊

長吉詩に見られる著しい特徴の一つは＝速かに流れ去る時間感覚＝ともいうべきものである。李白や杜甫、ことに杜甫においては＝持続の意志＝ともいうべきものを強く感じる。時間の持続と空間の拡大。長吉のは、時間が無のなかへどんどん消滅してゆくのである。

＊文学史＊

中国文学史と称するものを読んで、そこに名のみえる作家の個々の作品を読んでみる、そのとき、文学史がウソをついていると感じないで済むことはまれだ。考えてみると、それは多分ウソではない。遠くから眺めた山と足で上って見る山との相違だといってよいだろうか。わたしの乏しい経験にすぎないが、文学史にあげられる作品には、文学史が揺揺しない美とともに一種の退屈を感じることが多かった。その退屈のおよそは、わたしの読解力の不足によるのだろうと思う。残りの一部には、古典となった作品が、つねに博物館のケースにおさまっているようなもったいぶりにかかわりがあるだろう。

文学史家は概観と分類に忙しく、作品を楽しんで読んでいない。あるいはけとんどきったく読んでいない。過去の批評を、ノリとハサミでつないだだけのものが多い。過去の中国の批評は、ほとんどが独断的な印象批評だ。そいつを切り貼りした文学史がウソに見えるのは当然だ。

中国文学史は、作家のエピソード集に簡単な作品解題をくっつけて時代順に排列した読みものにすぎない。しかも、そのエピソードは信頼できず、作品解題は杜撰だ。

作品研究、作家研究、これが第一だ。その第一の仕事が進めば、文学史はおのずから生れてこよう。

＊長吉詩の特異性＊

「長吉詩は、中国文学中において、いな、世界文学中においてすら、特異で重要な存在だ」と、わたしはかつて書いた。＝特異＝ということばは誤解を招きやすいかもしれない。ひとが特異というとき、普遍性の欠如をさすことが多いからである。

長吉の詩は、特異ではあるが、普遍性を欠いてはいない。多くの中国詩につきまとう普遍性の欠如を拒絶することによって特異となったのだ。

中国詩につきまとう普遍性の欠如は、たぶん、儒教的合理主義に由来する。儒教が圧殺した儒教以前の神話世界は、人間の普遍的な心情世界であり、その様式はインドやヨーロッパのものとは異なってし、それを生み出す心情は普遍的なのだ。長吉の詩は、意識的に儒教的合理主義を拒否している。それは中国の伝統の外に出たのではなく、儒教によって中断された伝統が復活したのである。

キリスト教は、たぶん、ヨーロッパ人の心情の伝統を中断する矣で、儒教ほどでもないにしろ相似た働きをなしただろう。その回復は今後にのこされているだろう。

長吉詩の特異な普遍性は、今後の世界、すなわち、儒教的合理主義や絶対唯一の創造神信仰のいつわりが明らかになってゆく世界で、はじめてその価値が見出されるだろう。

＊夜の思想＊

長吉詩における「夜」の字の数、夜をうたった詩、夜においてうたった詩。以上から帰納される長吉の「夜」の思想。他の詩人のそれと比較せよ。

＊崩壊＊

長吉の詩を読むとき、ボードレールやランボーの詩を読むときに感じるものと相似た何かをうけとるのは確かで、それをあまり考えずに「近代性」というようなありふれたことばであらわそうとする。長吉は唐の詩人だが、唐の文化がその内部から崩壊しつつあることを感じとり、その崩壊感が、かれの詩の主要なテーマとなった。この崩壊をうたうところにボードレールやランボーとの相似があるのではないか。

かれの作品には諷喩詩が多く、悪政批判をやっているが、それらはかれがデモクラットであったから生れたのではなく、文化の崩壊がかれの感覚にまで「政治的」なかたちで迫ったからであろう。

＊日が短かすぎる＊　1952.4.30.

光よ　光よ

とにかく　一杯やらないか
知らんね　俺は
なぜ青空が高くって
黄なる大地が深いのか
ごらんの通り　月は冷たく日は熱く　人の命を煎るばかり
鮒を食らえば　太っちょに
蛙を食えば　脊せっぽち
神さまだって？　あるのかね
太一さま？　どこにいる
天の東の　若木の
下にいるのが　太陽をくわえた竜か
その竜の足ふった斬り　竜の肉　食おうじゃないか
そうすりゃ　朝にも昇れまい　夜になっても沈めまい
老いぼれ共はくたばらず　カキ共もなげくまい
黄金丹に白玉散　のむ必要もなくなるし
任公子きどりで
雲の上までも　口バを走らすバカも出るまい
劉徹じじいがくたばれば　茂陵のはかは骨の山
嬴政どんの棺おけは　どっと積んだる腐れ魚じゃて

長吉の「苦昼短」には、あらゆる瀆神的なことばがぶちまけられている。思いきってだをこねている。あらゆる価値をくつがえしている。だが、この瀆神の底に流れているのは、古代神話に対するあつい信頼だ。その点で、屈原の「天問」と共通する。

×この条の詩は原文に粗訳をそえたものだったが、ここに書きうつすに当って『平松集』（一九五八年方向社刊）におさめる訳文にあらためた。

＊陳商に＊　1952.5.3

長安の大都に住んで、私は二十歳。心はすっかり朽ちはてた。机にうずたかい楞伽経。わきにひろげた筵詩。人生につまずき日暮になると、ままよと酒をあふるのだ。今すでに聞されているこの道だ。頭に雨をいただく日どうして待とう。

陳世聖よ君もまた、粗衣まとい礼楽おさめ、儒者の文を学んで、世の人々にそのかたくなを責められている。柴の戸に車の轍は凍りつき、楡の木影は痩せている。たそがれにわたしを訪ねてくれた君、苦節もって春もやつれて。

太華山は五千仞、地をつんざき空にめざんで、傍えに寸尋の地をあまさず、直上して北斗にぶつかるのだ。公卿たちが愛せずとも、私の口をたれがふたごう。李長吉は太華を師とし、大坐して君と語ると、

×拙訳はここで中断し、『幽獄集』（一九五六年刊）には別の文語訳を入れている。いまから思うとこの口語訳を補訂したほうがよかったようだ。

＊長吉流行＊　1952.5.8

宮板李長吉集再刷本を見に象文堂書店にいった。店主の雑談の中から。

会津八一さんが長吉を愛読されたので、その門下の方々を中心に東京では李長吉熱が盛んで、中国以上です。

＊韓退之サークルの中での長吉の位置＊　1957.7.15

長吉が退之の門人的地位にいたことは、まず明らかである。長吉に「高軒過」があることによってよりも、退之に「諱弁」のあることのほうが有力な裏付となるであろう。交友もほとんど退之サークルの人々に限られていたらしいことが、長吉の詩によってわかる。ただ、長吉の詩に名の見える人々がかれをどう見ていたかは、あまり明らかではない。これらの人の書きのこしたものに長吉に関する記事がわりあい少いからである。

交友の親しさと詩文の唱和往復の頻度とは、かならずしも正比例しない。日常生活を共にする者の間では書簡もかわさないほうがあたりまえであろうから。

それにしても、弟子と唱和することをあれほど好んだ退之に「諱弁」以外に長吉にかかわるものがな